

# 生徒のキャリア形成に寄与するリフレクションガイドの開発

○今井 彩 (秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 教育系スタッフ)  
前原 和明 (秋田大学教育文化学部)

## 1 目的

特別支援学校では、生徒が自らのキャリアを主体的に構築していけるような指導が求められている。この主要な学習機会である産業現場等における実習（通称：現場実習）は、生徒が自己の職業適性や将来設計について考える機会とし、主体的な職業選択能力や職業意識を育成することを目指している。しかし、特別支援学校に在籍する生徒のキャリア形成支援について、指導上の困り感や課題を感じている教員が多い現状がある<sup>1)</sup>。この解決に向けては、現場実習の結果から生徒の現状を把握し<sup>2)</sup>、日々の教育活動に現場実習の結果を反映させていくことができるよう、個々のキャリア形成のスピードや職業意識のもち方に合わせて現場実習のフィードバックを行い、生徒のキャリア形成を支援していくことが大切である<sup>3)</sup>。

そこで本研究では、学校から社会への移行に向け、障害がある生徒の就労支援を担う教員が、生徒一人一人の現状を的確に把握し、キャリア形成に寄与する効果的な取組を実践できるよう、現場実習のフィードバック場面において活用できる教員のためのツール「リフレクションガイド」の開発を目的に、専門家の合意形成を図りながらガイドライン項目を検討する。

## 2 方法

### (1) 調査時期及び対象者

2023年6月上旬～8月上旬に、秋田県内全ての知的障害を主とする特別支援学校12校（分校3校含む）に勤務する高等部主事もしくは進路指導主事を調査対象とした。

### (2) 調査方法

調査対象者の意見集約を図りながら、ガイドライン項目の内容的妥当性を検証する方法としてデルファイ法を用いた。デルファイ法とは、特定のトピックについて、その分野の専門家に繰り返し質問を行い、コンセンサスを得る方法である<sup>4)</sup>。本研究では郵送による質問紙調査を2回行い、各調査で調査対象者が回答する期間に20日間、データ分析のために10日間を割り当てた。1回目の調査結果は、2回目の調査項目の修正に反映した。各項目への評価は7段階の尺度（0＝全く同意しない、1＝ほぼ同意しない、2＝どちらかという同意しない、3＝どちらともいえない、4＝どちらかという同意する、5＝ほぼ同意する、6＝完全に同意する）で行い、修正が必要だと思われる項目についてコメントを求めた。なお、2回目の調査では、1回

目の調査結果を調査対象者全員にフィードバックした。

### (3) 調査項目の作成

今井・前原が整理した「生徒のキャリア発達を促す現場実習のフィードバック方法」<sup>1)</sup>と「現場実習評価表がもつアセスメント機能」<sup>2)</sup>を参考に、現場実習の振り返り場面における教員のノウハウについて、現場実習評価表の活用、フィードバックの方法、教師の働き掛けに関する34の項目を作成した。

### (4) 分析方法

合意基準は、Jane & Mike<sup>4)</sup>を参考に、IQRが1.5以下かつ同意率が80%以上の場合とした。IQRは、回答の中央50%で構成される中央値付近の分散の尺度を示す。中央値、IQR、同意率の算出にはマイクロソフトエクセルの分析ツールを用いた。

### (5) 研究倫理

質問紙調査については、無記名調査で個人情報を扱わないこと、未協力の場合における不利益はないこと、ならびに研究の目的と内容を紙面上で説明し、調査協力の同意は質問紙への回答をもって得るものとした。

## 3 結果と考察

秋田県内の特別支援学校12校に勤務する高等部主事2名、進路指導主事10名から有効回答を得た（回収率100%）。調査対象者の特別支援学校における勤務年数は平均21.4年、高等部所属経験年数は平均16.3年だった。

1回目、2回目の調査結果を表1に示した。1回目の調査では、現場実習評価表の活用に関する項目9『評価結果を家庭に伝え、進路の選択肢を絞る』を除く全ての項目が合意基準を満たした。項目9はIQRが2のため、合意基準を満たさなかった。修正を求めるコメントからは、「評価表の結果をそのまま家庭に伝えることはしない」、「どのように結果を活用していくかが大事」、「家庭への伝え方は慎重さが必要」、「保護者の認識や特性に合わせて丁寧に連携することを心掛けている」というように、評価結果の活用の仕方や家庭への伝え方に関して指摘があったことから、ダイレクトに評価結果を伝えるのではなく、それぞれの家庭に合わせて評価結果を活用していく表現となるよう、『実習先の評価について家庭に伝え、進路の選択肢を絞る』と修正した。なお、この項目9の修正に合わせて『評価結果を家庭に伝え、…』となっていた項目5～8の表現を全て『実習先の評価について家庭に伝え、…』に

表1 デルファイ法を用いた1回目と2回目の調査結果

調査項目(修正後)	1回目			2回目		
	中央値	IQR	同意率	中央値	IQR	同意率
1 実習先の評価を活用し、生徒が現場実習での課題に気付けるようにする。	5	1	100%	5	1	100%
2 実習先の評価を活用し、生徒が現場実習での成果に気付けるようにする。	5.5	1	100%	5.5	1	100%
3 実習先の評価を活用し、生徒が自分の苦手なことに気付けるようにする。	5	1	100%	5	0.25	100%
4 実習先の評価を活用し、生徒が自分の得意なことに気付けるようにする。	5	1	100%	5	1	100%
5 実習先の評価について家庭に伝え、進路選択の参考にしてもらう。	5	1	100%	5	0.25	100%
6 実習の評価について家庭に伝え、進路決定の参考にしてもらう。	5	1.25	92%	5	0.25	100%
7 実習先の評価について家庭に伝え、生徒の現状を知ってもらう。	5	0.25	100%	5	1	100%
8 実習先の評価について家庭に伝え、今後の指導・支援について協力を仰ぐ。	5	1	92%	5	1	100%
9 実習先の評価について家庭に伝え、進路の選択肢を絞る。	5	2	92%	5	0.5	100%
10 実習先の評価を参考にし、個別の支援計画の見直しを図ったり個別の移行支援計画の作成に役立てたりする。	4.5	1	83%	5	1.25	83%
11 評価結果を参考に、生徒の現場実習の課題を教育活動で改善する。	5	1	100%	5	0.25	100%
12 評価結果を参考に、生徒の現場実習の成果を教育活動で生かす。	5.5	1	100%	5.5	1	100%
13 評価結果を今後の指導・支援の在り方の参考に用いる。	5	1	100%	5	1	100%
14 評価結果の情報を共有し、学部もしくは学年・学級全体の指導の在り方を見直す。	5	1	83%	5	1.25	92%
15 実習先の評価を参考に、作業内容が生徒に合っていたかどうか検討する。	5	1	92%	5	1.25	92%
16 実習先の評価を参考に、作業環境が生徒に合っていたかどうかを検討する。	5	1.25	83%	5	1.25	92%
17 評価結果から、生徒の現状について教員間で情報を共有する。	5.5	1	100%	5	1	100%
18 評価結果から、生徒に必要な支援について検討する。	5	1	100%	5	1	100%
19 事前に現場実習先と評価基準の認識を一致させておく。	5	1	92%	5	1	100%
20 事前に現場実習先に重要視している評価項目(生徒の目標)を伝えておく。	5	0.5	83%	5	1	92%
21 生徒の自己理解の発達段階に応じながら、生徒が理想と現実について考えられるよう、現場実習先からの評価の伝え方を工夫しながら個別に面談を行う。	6	1	100%	5	1	100%
22 保護者と現状を共有し、指導や支援の方向性について共に考える。	5	1	100%	5	1	100%
23 生徒が自分の現状を認識できるよう、友達と成果や課題を共有する場を設ける。	5	1	100%	5	0.25	100%
24 適切な目標設定への援助に向け、より生徒理解を深められるよう、周囲の教員と生徒の実態把握に努めたり、適切なアセスメントを実施したりする。	5.5	1	100%	5.5	1	100%
25 生徒が「課題」と認識した事柄について、「課題となる理由」を一緒に考え、生徒自身が自分への理解を深めながら達成可能な目標を設定できるよう導く。	5.5	1	100%	6	1	100%
26 生徒の課題への意識を高め、目標の達成状況を評価する。	5	1	100%	5	1	100%
27 生徒の課題解決に向けた行動が、実際の社会生活をイメージした行動につながるよう意味付けをする。	5	1	100%	5	1	100%
28 生徒が自分の成長を客観的に認識できるよう、学習の中で記録や評価ツールを活用し、自分の行動を振り返ることができる場を設ける。	5	1	100%	5	1	100%
29 学級や学習グループの中で、生徒が互いの成長について語ったりする場を設ける。	5	1	100%	5	1	100%
30 日々の学習における生徒の様子から自分の指導を省察するため、他教員と情報共有を図ったり意見交換を行ったりする。	5.5	1	100%	5.5	1	100%
31 「何に気付いてほしいか」「なぜ気付いてほしいか」「どのような方法であれば気付くことができるか」といった明確なねらいをもって働き掛ける。	6	1	100%	6	1	100%
32 実習先からの評価は、生徒が自分の認識の違いに気付けるように活用するだけでなく、教員が自らの指導に生かして行くための標とする。	6	1	100%	5	1	100%
33 生徒の目標達成に向け、一貫した指導を行うことができるよう、生徒の課題や生徒の実態に応じた指導方法を教師間で共有する。	5	1	100%	5	1	100%
34 生徒の課題解決に向けた行動が、自ら成長するための自発的な行動となるよう、生徒が目標に向かって取り組む行動に対して意味付けを図る。	6	1	100%	5.5	1	100%

修正した。修正後の2回目の調査では、項目9のIQRが0.5となり、全ての項目で合意基準を満たした。

本研究では、現場実習のフィードバック場面において活用するリフレクションガイドのガイドライン項目について、12名の専門家の合意を得ることができた。今後はこのガイドライン項目が、勤務経験年数や高等部所属年数に関係なく、教員が生徒に対して効果的に活用できるか検証する必要がある。

【参考文献】

- 1) 今井彩・前原和明『特別支援学校における生徒のキャリア発達を促す現場実習のフィードバック方法』, 「秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門 77」, (2022) p. 19-26
- 2) 今井彩・前原和明『特別支援学校高等部におけるキャリア教育の充実に向けた現場実習評価表の活用—秋田県中央地区の特別支援

- 学校に在籍する進路指導主事へのインタビュー調査から—』, 「日本教育大学協会研究年報 第41集」, (2023), p. 15-25
- 3) 今井彩・前原和明『特別支援学校高等部における現場実習の効果的なフィードバックの在り方—秋田県内特別支援学校への調査から—』, 『Journal of Inclusive Education. 11』, (2022), p. 56-67.
  - 4) Jane Chalmers & Mike Armour 『The Delphi Technique』, 『Handbook of Research Methods in Health Social Sciences. 41』, (2019), p. 716-729

【連絡先】

今井 彩  
 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校  
 Tel : 018-862-8583  
 e-mail : ayaimai0918@gmail.com